

# いの流水俳壇

## 「当季雑詠」

道草の多い使いや落の臺

間 浩太選

岡本とも子

〔評〕早春に、あたりが未だ枯色のときに、土手や藪蔭に萌黄浅緑色の花穂が、土中より顔を出します。これを見て、春が近いなあと感じます。落の臺は、食用になり、柔らかく、少しの苦みが、なんとも言えない味であり、好む人も多い。作者はスーパーへ買い物に行く途中、落の臺を発見して、見逃す事ができず、買物は、暫く忘れて採取したことで、春の息吹きを感じた、喜びが伝わってきます。

すぐそこに光りと風と春の色

大川 節弥

〔評〕春の色とは、春の日光の明るい柔らかさである。春の日とか、春日影という具体的な感じとは少し違う。作者は、春の日とか、春の空、春天、或いは春の雲とか、似た季語の中から、少し違う季語を使った、繊細な感覚に感心しました。待春の気持が良く出ています。

白木蓮バイク置き場を点しけり

植田 紀子

〔評〕庭の片隅を、バイクの仮駐輪場としているが、そこに、白木蓮の少し大きな樹があると、言う事で、白木蓮の花は、非常に大きく、また葉も無いので、その白い花を、電灯と、比喩したところが、面白くまた、わかり易い句である。

この作者、紀子さんは、高知県俳句連盟の副会長や、その他の要職を長く、務められています。忙しい時間を割いては、度々当俳壇の、ご指導に、お出で下さる、大先輩です。

春光や水のことばを水が聞く

伊藤 たみ

〔評〕作者は、旧吾北出身で、京都市に、在住の方ですが、すばらしい句を投句されています。

この句は、前の大川さんの句と同じように、春の明るい柔らかい、日光を春光と、言っています。水の言葉とは、どんな言葉でしょうか、読者、読者がそれぞれ想像して面白い。

作者の別の句に、近江の句がありますので、琵琶湖を詠んだものと、私はかつて、考えました。例えば湖の表面の水が、湖底近くの水に「おい、待っていた春が来たよ、眠っている鮒や海老を、起こしな

さい」と話しかけたと考えると楽しい。

「註」句は、すつきりしていることが大切で、あれも、これもと言葉を押し込んではいけない、くどくどと説明してもいけない、と言われています。(評)をしました、四句はいずれも句形は、すつきりして、わかりやすく、よい句だと思えました。

炒めたる青菜に落とす寒卵 片岡 包女  
 野蒜和えあの頃母も祖母も居て 竹崎 光子  
 桃の花離れ住む孫の誕生日 川村 博子  
 チャルメラの笛呼ぶ露地の余寒かな 刈谷 志津  
 謂われあるねじれヒノキや山臈 井上 郁子  
 野仏の胸当て古き下萌える 友草 水月  
 鶯や峰の彼方でのど自慢 森岡 照月  
 やわらかき拳振り上げ落の臺 松尾満津於  
 菜の花や見えかくれつつ孫帰る 弘瀬うき子  
 花ならば幸いという色を持つ 秋田 律子  
 夜は夜の明るさのあり花菜畑 間 信子  
 水張りし広き田空が溶けている 間 浩太

次 題 「当季雑詠」  
 締め切り 毎月第2月曜

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133

平成20年度

こども川柳年間優秀作品

入選作品

■最優秀賞

地図の世界 そにひろがる フォトジー  
 川内小3年 片岡 修斗

■優秀賞

めぐましが おきろおきろと ベルならず  
 神谷小5年 坂本 志織  
 秋風と もみじがいに 散歩する  
 清水第一小6年 伊東 邑晟  
 夏休み 楽しかったな 夏休み  
 伊野小3年 比嘉 きょうか

■入選

彼岸花 一生けん命 はそぐる  
 下八川小6年 大久保貴史  
 五郎ジー 出来ることから 始めよう  
 下八川小4年 宗我部浩大  
 雨の日は 中で静かに 本を読む  
 伊野小4年 野村 菜月  
 あやまると けんかしても なかなおり  
 伊野小4年 大久保みほ  
 風がふき 落ち葉がおよぐ 秋の空  
 川内小3年 辻 航希  
 ふうりんが ちりちりちりり おどてる  
 清水第一小1年 いたどりさ

※学年は、平成20年度中のものです。